

長野県関係「八景和歌」資料稿

中 西 満 義

はじめに

いわゆる「平成の大合併」と呼ばれる21世紀の市町村合併によって、行政上の地理区画が大きく塗り替えられようとしている。長野県に限定しても、平成15年9月1日には、更埴市と更級郡上山田町、埴科郡戸倉町の一市二町が合併して千曲市が誕生した。また、平成16年4月1日には、小県郡東部町と北佐久郡北御牧村の一町一村が合併して東御市が誕生する。さらに、岐阜県中津川市と合併を進めている木曾郡山口村は、今回初の越境合併として全国的に注目を集めている。時限立法の合併特例法に基づく今回の騒動は、各地方自治体の行政当局はもちろんのこと、そこに暮らす住民たちに、これまで意識することの稀であった地域への関心を俄に抱かせる契機となった。

明治維新の廃藩置県に始まり、近代においても市町村の合併（あるいは「住居表示に関する法律」の施行）は幾度か行われてきた。土地の伝承や歴史を内包した地名はその都度失われることになり、それぞれの地名の文字を組み合わせたり、住民の投票によって決められた新地名に眉を顰める人々は決して少なくない。しかしながら、このような機会にこそ、改めて自分たちの身の回りのことを、すなわち、地域の歴史や地理や自然などを見直す必要があるのではないだろうか。一人歩きを始めた地名であっても、それが風景をともなって印象を刻されるとき、新たな伝統が附加されるのである。

さて、本稿では、長野県における八景、とりわけ、八景和歌にかんする七種の資料を掲載する。時代的には、近世、ならびに明治期のもので、「信濃八景」と題する数種の観光絵はがき類はここでは埒外とした。そもそも、八景については、中国、湖南省

の洞庭湖の南、瀟水と湘水とが合流して洞庭湖に注ぐあたりの景勝地を題材とした「瀟湘八景」を嚆矢とする。夕暮の時間を主としたその景勝は、詩や絵画の題材に取り上げられて多くの作品が作られ、室町時代には多くの瀟湘八景図が舶載され、それによって水墨画など、障屏画によく描かれた⁽¹⁾。そして、五山の僧や堂上などによって瀟湘八景図を主題とした漢詩も制作されるようになり、八景和歌の成立へと展開してゆく⁽²⁾。一方、和歌文学には国々の名所（歌枕）を詠み込む伝統が早くからあり、中世後期から近世期にかけて多くの「名所歌集」が編まれた。そのような土壌も与って、「瀟湘八景」は日本に定着をみ、次第にある特定の地域の名所歌枕をまとめた八景（異種八景）が制作されるようになった。「近江八景」や南都の景勝をまとめた「南京八景」をはじめとして、「修学寺（院）八景」、「塩松八景」、「若狭八景」、「甲斐八景」、「金沢八景」、「敵島八景」等々、その数枚挙にいとまがない。長野県にかかわる八景を通観すると、2「木曾八景」がもっとも著名で、さらに地域を限定した3「日義八景」、4「上島八景」などがその影響下に制作されている。また、同じ八景であっても、詠出作品が複数存在したり（2「木曾八景」）と、今後それぞれに詳細な検討を加える必要がある。

ともあれ、ここに八景和歌を中心とした資料を掲載して、長野県関係の八景研究における基礎とし、地域文化創成の手掛かりとしたい。管見により誤謬、見落とし等が存すると思われるが、大方のご批正とご教示をお願いする。

注

(1) 「日本の美術」・124「瀟湘八景図」（昭51・9、至文堂）、参照。

(2) 瀟湘八景の日本における展開については、有吉保氏「中世文学に及ぼした中国文学の影響—瀟湘八景詩の場合」（『日本文化の原点の総合的探究1 言語・文学』昭59、日本大学総合科学研究所）に詳しい。

*本稿は、平成14年6月15日に開催された上田女子短期大学・公開講座「日本文化の新しいかたち」において発表した内容（「地域、再発見—八景歌の伝統をたずねる—」）、ならびに、平成14年12月14日、松本大学において開催された長野県国語国文学会で発表した内容（長野県関係「八景和歌」考）の資料の一部

を加筆訂正したものである。

1 「信濃八景之圖」

長野県立歴史館蔵。「今井家文書(3・21・1)」(「歴史館文書目録1」、一〇七頁)の一点。八箇所の風景を一葉ごとに描き(木版彩色)、それぞれに和歌を一首添える。最終葉と思われる「戸隠山暮雪」を描いた枠外上段に朱で「信濃八景之圖 故関長年撰 湯本長貫画」とあり、同じく枠外左に

御届 明治廿一年十二月五日印刷 発行兼印刷者 長野県下高井郡小田中村三十一番地
全 年 全 月 七日出板 井本伊左衛門

という朱書がある。また、袋紙にあたる畳紙には女官姿の人物を背景に、中央に「信濃八景之圖」(書題箋)、左下方に「長野縣下高井郡中野町三十一番地 発賣書林 静観堂」と刻されている。和歌の作者は、すべて「式部女」とするが、詳細は未詳。八箇所の選定については、姨捨山・園原・浅間岳・木曾路・諏訪湖と、古典和歌にも詠出された著名な歌枕が多いが、如来信仰で多くの崇拝を集めた善光寺、そして山岳修験の道場・霊山とされた戸隠山が選定されているのは、作者が現在の中野市出身の湯本長貫であるゆえであろうか。「千曲川帰帆」の図案も飯山と木島の境の「綱切橋」を描いたもので、北信地方に偏っていることは否めないが、八景の土地選定に関しては概ね妥当と言える。

姨捨山秋月

たかき名を聞にもかなしおはすてやむかし思へと月のてるらん

園原夜雨

はゝき木のあるかなきかは夜のあめにそのはゝ山をとふひともなし

善光寺晚鐘

とほきよりあゆみをはこふたひ人ののりの御庭にいりあひのかね

千曲川帰帆

よろつよも岩根めぐりてちくま川たゆたに行てかへるともふね

浅間岳夕照

いつしかと浅まのけふりたえしより入日かゝやくみねのゆふはえ

木曾路晴嵐

旅人もあきは錦の袖はえてはるゝ嵐にわたるかけはし

諏訪湖落雁

すはのうみや落くるかりのたまつさをこほりのはしにうちはへてみむ

戸隠山暮雪

とかくしやいたくなふりそくれのゆきたてこもるへき山もあらなくに

2 「木曾（岐蘇）八景」

『国書総目録』には、東京都立日比谷図書館・加賀文庫旧蔵（現在、東京都立中央図書館・特別文庫蔵）

2457「岐蘇八景」刊（金属版）一帖 半 横

とある。これは後にも述べるように、本来は八葉別々の一枚刷りであったものを、後に所有者が綴じたものと思われる。マイクロ写真から電子複写したものによって、以下に本文を掲げる。

木曾八景

駒岳夕照

おしめ人入日も山の名にしおふひまゆく駒のすくる光りを

風越晴嵐

吹もまたあらしやよはきたえ〜にくもはれ残る風越の峯

横川秋月

秋ふかき高根のしけみわけ過てよかわにすめる月そさやけき

御嶽暮雪

しなのちやむかはぬ不二のおもかけをこゝにみたけのゆきの夕はえ

掛橋朝霞

朝日影にはへるみねは猶晴れてたによりうめむ木曾のかけはし

寢覚夜雨

七とせのあとおやおもふたれか又ねさめの床の雨のよすから

小野瀑布

名にたてる木曾の麻衣それならてくも井にさらせたきのしらいと

德音寺^{ママ} 暁鐘

遠近は聞もさためぬ山風のさそふまゝなる入相のかね

木曾の景勝地の一つに数えられている寢覚の床にある臨川寺（寢覚山臨川寺、臨濟宗）には、「木曾八景」の版木（九枚）が存する。すなわち、木曾の名勝地を彫り込んだ八枚に加えて、その包み紙の表紙用として刻されたのであろう、二重野に

木曾 八景

祐川画

頂月堂

探川刀

と刻された一枚が存する。臨川寺ご住職のお話によると、御嶽講などで賑わった街道往来者に土産品として供されていたようで、その図版を用いた観光絵はがきも昭和四十年頃までは販売されていたとのことである。

さて、この版木によって刷られた図柄を確認すると、加賀文庫旧蔵のそれと一致する。さらに、臨川寺ご住職により、同上松町吉野のお宅から別種の「木曾八景」が見出された由何うことができた。先の祐川・探川の手になるものと比較すると、図柄は精緻なもので、和歌に加えてそれぞれに七言絶句が添えられている。いま、ご許可を得て、漢詩ならびに和歌を示すと、つぎのごとくである。なお、木曾義仲の菩提寺として知られる日義村徳音寺は暮れ六つの鐘が古来有名であるが、上記木版刷一葉には、「入相のかね」と詠まれているながら「徳音寺曉鐘」とある。つぎに掲げる別種は、「徳音晚鐘」となっている。

衡川秋月

茶烟細々裊風斜

打稻歌残迷宿鴉

日暮啼猿山寂寞

和霜片月満農家

秋ふかき高ねのしけみわけ過て与川にすめる月そさやけき

小野瀑布

激石飛泉響若雷

生風起雨洗塵埃

行人偶倚懸巖下

萬顆明珠打袂来

名にたてる木曾の麻衣それならてくも井にさらせ滝のしらいと

駒岳夕照

駒嶽崔嵬入碧空

孤峯北指画図中

崑嶺白雲黄昏色

総使行人詩速工^カ

をしめひと入日も山の名にしおふひま行駒のすくるひかりを

栈道朝霞

栈道捫蘿客過遲^カ

深溪曉暗曲嵯移

行々忽怪紅波漲

嶺上朝霞照水時

朝日影匂へるみねは猶はれてたによりかすむ木曾のかけはし

御嶽暮雪

冬郊遙望萬尋峯

亂靄晴來積雪濃

薄暮更添新月色

琢成天畔玉芙蓉

しなのちやむかはぬ不二のおもかけを爰にみたけの雪の夕はえ

德音晚鐘

梵刹崢嶸鎖暮烟

將軍古戍石崑嶺

山風日夕鐘聲動

空憶英心萬代傳

遠近は聞もさためぬ山風のさそふまゝなる入相のかね

寢覚夜雨

借問仙翁何處之

遺蹤^カ准駐石床奇

寒雲影落空潭曲

更想秋風夜雨時

七とせのあとをやおもふたれか又ねさめの床の雨のよすから

風越晴嵐

古道客稀雲樹連

數聲猿叫^カ有蕭然

林間晴盡山嵐氣

樵父相呼下峻巔

吹もまたあらしやよはきたえ〜にくも晴のこる風越のみね

〔参考・1〕

秋里籬島『木曾路名所図絵』（文化二）・卷之三

寢覚山臨川寺 寢覚にあり。禅宗、京師妙心寺派。

本尊釈迦仏（開山活山和尚。）

弁財天祠（方丈の前にあり。尾州第四代円覚院殿御建立なり。）

木曾八景

寢覚夜雨 棧道朝霞

小野瀑布 德音晩鐘

駒嶽夕照 衡川秋月

御嶽暮雪 風越晴嵐

各詩あり 福島関甲山氏良由作

尾州の家臣なり

〔参考・2〕

色部祐次郎（城南）『科野名所集』（城南書屋、明治42）

「德音寺」

西筑摩郡日義村大字宮の越に在り。臨濟宗に屬し、日照山と号す。京師妙心寺の派山なり。木曾義仲の開基にして靈牌を蔵す。是を以て木曾氏の遺物尚存するもの多し。寺は山紫水明の幽境に位し、木曾山中八景の一に数へらる。八景とは即ち棧橋朝霞、小野瀑布、横川秋月、風越晴嵐、寢覚夜雨、德音晩鐘、駒嶽夕照、御嶽暮雪是なり。尾張の殿人横井也有の題詠あれど、良しとも覚えねばこゝに載せず。

〔参考・3〕

『西筑摩郡誌』第二編 地理 第十三章 名所旧跡

「与川秋月」

与川部落は古昔前記羅天阻道ある為一時国道を通じ今の大桑村長野に出でたることあり因りて古典菴の観月会は与川秋月の名を以て木曾八景の一に数へらゝに至れり

秋深き高根のしけみ分すきて与川にすめる月ぞ隈なき 横井也有

〔参考・4〕

『木曾——歴史と民俗を訪ねて——』（木曾教育会郷土館委員会、昭和43）

「木曾八景」は、近江八景になぞらえて尾張中納言宗勝の頃（一七四三年前後）、尾張藩の書物奉行をしていた松平君山が木曾路を訪れ作ったともいわれ、一説には尾張の俳諧師、横井也有ともいわれている。

〔参考・5〕

徳川宗勝の木曾八景歌

掛橋朝霞

朝またき残れる雪ハさえなからかすみそワたる木曾のかけはし

横川秋月

岩根こす波も氷ると見るまてにあきの横川の月そさやけき

小野瀑布

天の川同しなかれやかよふらん雲より落る小のゝ瀧津瀬

德音晩鐘

山深み寺ハいつくと白雲のうちよりひゞく入相のかね

風越晴嵐

雲霧も嵐にはれてしかすかに名もあらはるゝ風越の峯

寢覚夜雨

ふりにける夢ハ昔のあともなくね覚の床の夜半の村雨

御嶽暮雪

くれかゝるみさかハ雪にうつもれぬ嵐の末を松に残して

駒嶽夕照

駒かたけ棊の野辺ハくれ初て雪に入日の影そ残れる

*奥村徳義の随筆『松濤棹集』四に収載。

*松平君山に応製詩あり（延享三年、『幣帚集』所収）

【参考文献】

*河島芳和氏「尾張藩木曾史序説」

「郷土文化」52・2（通巻一七九号）所収、（名古屋郷土文化会、1993）

*和田重郎氏「考証 木曾八景一木曾の風光と歴史を訪ねて一」

（しょうわ書房、平成13・10）

「木曾谷各地の八景」として、1 現代式木曾八勝、2 日義村八勝（後掲）、3 福島八景、4 黒川八景を掲げる。

*山下生六氏「郷土研究会報」20（平成11・7）

幕末、土方歳三の木曾八景和歌（色紙）を紹介する。

3 「日義八景」（『西筑摩郡誌』）

『西筑摩郡誌』第二編 地理 第十三章 名所旧跡の「日義村の懐古」の章には、駒ヶ嶽初雪、山吹山紅葉、山吹橋下の巴淵、南宮神社、宣公旧里碑、徳音寺（義仲廟、医王殿）、虎溪橋眺望、岩鼻観音等は此地の八勝と称せらる。（三二〇頁）とある。また、『同郡誌』「山吹山」の項に、「古来紅葉を以て名あり十月下旬全山鮮麗錦繡を織るが如し信濃毎日新聞此山を以て信濃八景の一に数ふ」とあるが、未確認。

さらに、『同郡誌』第三編歴史 後篇 木曾人物誌の「征矢野三羽」の項には、「三羽撰する所日義八勝の詠左の如し」として、つぎのような八景和歌を掲げる。

駒ヶ岳初雪

けさみれは額白なる駒かたけ紅葉の上にはらはれにけり

宣公旧里碑

出でしより帰らぬ君か故郷の昔を今に忍ふいしふみ

南宮神社

神ならぬ松に昔のこと問はん幾世ふりにし朱の玉垣

巴女潭

あらぬ瀬に世はなりぬれと昔より巴か淵はかはらさりけり

木曾錦江

紅葉のにしきをあらふ川水は秋の流の名にこそありけん

木曾義仲廟

大空にのほる旭日と輝きし其名はかりは朽せさりけり

虎溪橋

夢にたに見ぬもろこしのはてまでも思ひわたれとかけし板橋

徳音寺医王殿

みほとけの誓ひをたのむ諸人のあゆみは絶えず玉のとほそに

4 「上島八景」

延享元（1745）年、岩戸権現宮（社御嶽神社里宮）へ奉納された絵馬に附された八景詩歌。詩（七言絶句）は、省略。絵馬は、昭和57年2月1日に大滝村有形文化財の指定を受けている由である。成立時期、制作意図などについて、木曾八景との関係が注目されるが、詳細は不明。

岩戸秋月

みつかれて尊岩戸の秋の月水にうつろふかげのさやけき

松恋夜雨

おちこちの友も千とせを松恋の木かげにもるゝる夜の雨哉

桐林晩鐘

三井寺を爰に写して桐林の鐘のひゞきに花の咲くらん

溝口夕照

嵐吹夕日につれて帰る道かた袖さむき沖のうら風

幕嶋晴嵐

おとたかく吹まく嶋の川風にあらしとともにかへる山人

三澤帰帆

心から人もあや有無川越の橋わたり往起迹の釣舟

野口落雁

野を過（て）里をも越て木曾谷の乃くちに落る雁かねのこゑ

三笠暮雪

空はるゝ里ハかり穂の小六月三笠の山にふれる白ゆき

【参考文献】

*河島芳和氏「木曾八景と上島八景絵馬」

「木曾」24（木曾郷土文化研究会、1991・7）、所収

*『村誌 大滝』下巻（昭和36・2）

5 『新題松本八景歌集』

序文（百瀬素民、丸山行前）によると、明治25年9月、四柱神社への奉献和歌であることが知られる。以下の八題を並木信明以下、三十二名の歌人が詠む。詠歌総数256首。明治7年、筑摩県庁の所在地である松本に神道中教院が設立、明治12年10月、四柱神社として一社を興した。明治21年1月の松本大火により類焼、大正13年まで仮殿にて奉斎されていたことからすると、早期の社殿復興を祈る思いも込められていたと推察される。三十二名の作者のうち、吉澤元城（東京）を除く歌人たちは、松本を中心とした県内の歌人で、高橋相蔵（在越後新潟）、河野通重（島内）、今泉親光（島内）など、大岩昌蔵（松本）、浅井湧兄弟たちの列した月次歌会（歌合）出詠者であった名が散見する。松本を中心とした県内旧派歌人たちのまとまった詠草で、太田水穂をはじめとする新派歌人が活躍する明治30年代以前の状況を示唆する資料と言えよう。

ここでは、紙幅の関係で、「深志晴嵐」のみ、すべての歌人の詠草を掲げ、他の七題については、並木信明と丸山行前に適宜一名を加えて、三首を掲出することにする。

深志晴嵐

松はかり昔の儘にしけり合てふかしの城戸に嵐ふくなり

ふりぬるをとへはあらしの聲立て哀もふかしきとの老松

南佐久野澤

並木信明

島内

河野通重

在越後新潟

しら雲のふかしの花は散果て青葉の露をふくあらしかな

高橋相蔵

上伊那赤穂

雲はらふ深志の里の夕あらし千とせのはしを吹渡るらむ

小町谷杉園

諏訪玉川

北南ふかしの空の雲はれて市のちまたにあらしふくなり

牛山利城

南佐久野澤

立そめし松の嵐に朝きりはふかしの大城みやはれにけり

並木信温

松本

木の葉ちる夜はの嵐の吹やみて秋もふかしの里そ静けき

柳原美光

上水内柵

月影はさやかに見えて更る夜のふかしの里にあらし吹也

松澤正澄

松本

浮雲はあらしに晴てまつ本のまつの常磐の色まさりつつ

松木敬基

諏訪蔦木

大そらの色もふかしの名に晴れてあらし吹なり里の遠近

岩本節次

松本

千早振階戸の奥そふかし野のあらしにはるる天の八重雲

豊原唐徳

島内

めと羽川流るる水の音すみてきしの高まつあらし吹なり

川船高純

松本

鉢伏の峰にかかれる雲はれてふかしの里にあらしふく也

河内直武

松本

吹はらふあらしに晴て朝きりのふかしの空は浮雲もなし

池田正誠

島内

たきすさふゆふけの煙靡かしてあらし吹なり城戸の高松

今泉親光

松本

朝日さす犬飼山はきりはれてふかしの里に吹あらしかな

丸山香風

	大村	
梅か香のふかしの里を吹わたる音また寒し山おろしの風		鈴木尚延
	松本	
老まつの色はふかしのさとなれや渡る嵐の音そさやけき		棚橋保春
	松本	
賑へる名さへふかしの里なれは嵐のおともさやけかり鳧		中澤爲樹
	松本	
時雨つるあらしは晴て松の色の深志の里に日影さすなり		高橋良休
	松本	
吹おろす松のあらしに雲晴てふかしの空は塵たにもなし		加藤知基
	伊那飯田	
ふき拂ふ嵐のかぜに雲はれてみとりふかしのそらそのとけき		野田登志子
	松本	
あらし吹音もふかしの里わよりきりはれわたる犬飼の山		富橋巴
	松本	
天守る雲にそひゆる御郭のいらかの上をふくあらしかな		大輪鐵石
	松本	
久堅のそら行雲の影きえてふかしのまつに吹あらしかな		恩田權太郎
	松本	
曉のあらしの末に雲はれてふかしの城戸に朝日さすなり		太田賀茂
	松本	
小夜嵐音は外山に残れともふかしの里は日かけのとけし		深尾友重
	東京	
吹はらふ夜はの嵐に雲はれてけさは深志の城戸高く見ゆ		吉澤元城
	松本	
古へをおもふ心も深しなる城門のあととふ山おろしかな		寺村安憲
	松本	
空の海に虎てふ魚の影見えてあらしにはるゝ秋のうき雲		大岩昌藏

	松本	
立こめて霧はあらしに吹はれて深志の城戸に日影さす也		百瀬素民
	松本	
あらしふく深志の空は霧晴て城のへに高くたつ鳴わたる		丸山行前
木澤晩鐘		
つくつくと木澤に響く鐘の音にやかて暮行をちこちの里		信明
〈十五首、省略〉		
入相のかねは遙にきこゆれときりにかくれて見えぬ山寺		尚延
〈十四首、省略〉		
秋ふかき哀を見せて紅葉ちる木澤の山のいりあひのかね		行前
乗鞍暮雪		
駒とめて見渡すかきりましろなりのりくら山の雪の夕暮		信明
〈十首、省略〉		
なかめやるのりくら山のゆふ日影雪の深さを空にする哉		高純
〈十九首、省略〉		
雲間より夕日の影はさしなから乗鞍山にゆきはふりつつ		行前
宮淵帰舟		
川なみの音たかくこそ聞えけれふねひきかへる龍の宮淵		信明
千早振神の宮淵こきかへるふな子や明日の日より祈らむ		通重
〈二十九首、省略〉		
夕されは田川の岸を棹さして家路にいそく里のいなふね		行前
笠松夜雨		
いく人か袖ぬらすらん笠松のよるのしくれの音の淋しさ		信明

〈五首、省略〉

立よりてこの笠まつの下蔭を宿とししのけよはの村さめ 美光

〈二十四首、省略〉

笠まつをもるる雫に城山のよはのあらしを雨とこそしれ 行前

鎌田落雁

をしねかる時をたかへす鳴連てかま田の面に落る雁かね 信明

〈二十六首、省略〉

立つこむる霧に鎌田は見えねとも聲声はさやかに落る雁かね 元城

〈三首、省略〉

雲拂ふ夜半の嵐に月すみてかまたにおつる天つかりかね 行前

籠鼻秋月

かこはなの月に昔を忍ふ哉くまなくすめる秋のよなよな 信明

〈三首、省略〉

籠はなや秋のもなかにつきかけは姨捨山も外ならぬかは 利城

〈二十六首、省略〉

名にしおふ籠鼻山にくまもなくすみ登りけり秋のよの月 行前

梓川夕照

岩はしるしらなみ高し梓川にほふゆふ日のかげもうつりて 信明

〈二十首、省略〉

あつさ川波の上遠くてりそひて光りくまなき入日かけ哉 登志子

〈九首、省略〉

梓川なかはしわたる旅人の菅のをかさにゆふ日さすなり 行前

〔参考文献〕

*『松本市史』第二巻 歴史編Ⅲ 近代（平成7・11）

6 「諏訪八勝」

諏訪湖にかんしては、歌枕としての印象は比較的薄いですが、平安時代後期（院政期）に新たな歌枕として六条藤家歌人たちを中心として詠出された地名である。厳冬期の全面結氷による「御神渡」で知られ、凍り付く冬のイメージをともなって表現されることが多かった。ここでは、文政七（1824）年刊の「洲羽八勝」（東京都立日比谷図書館・加賀文庫旧蔵（現在、東京都立中央図書館・特別文庫蔵）【2466「洲羽八勝」吉田廉卿著、文政七刊】、画詩略）と、天保九（1838）年刊の「諏訪八勝詩」（画・南溟、漢詩・吉田靈鳳、『国書総目録』には、ほかに天保十四年版を掲げるが、明治版も存する）の詩題のみを掲げることにする。

洲羽八勝

信州一叢祠・高嶋衣之崎・雄坂大悲閣・釜口天女洲・
幹澤巖窟・八嶽澁温泉・御射山穂屋祀・（判読不能）

諏訪八勝詩

一宮・衣崎・小坂・尾尻・
唐澤・澁陽・御射山・氷湖

7 「馬籠八景」

天保（一八三〇～一八四三）頃の成立。八名の美濃派俳人が各一句を詠出。馬籠出身の画家、蜂谷蘭溪（一七六七～一八四〇）の筆になる俳画が描かれる。先述のように、中津川市との合併が実施された場合、岐阜県関係の八景資料ということになる。

宮守夕照

暮おしむ朱の鳥居や夕日影（逸歩仙）

番外戸青嵐

吹替えて田毎の波や青あらし（東武 琴和坊）

恵那暮雪

峰ばかり暮れてもくれず恵那の雪（八十叟 受左坊）

永昌寺晚鐘

寺の名に鐘の響きも日も永し（良寿仙）

背戸田落雁

人気なき浦田や雁の遊び所（土游）

鹿越夜雨

鹿越や雨の夜は又ほととぎす（櫛化）

園原秋月

ははき木もたづねて見ばやけふの月（完古）

蘇川帰帆

汲でかえる中の間の水か妒びらきに（風二仙）

〔参考文献〕

*『山口村史』上巻（平成7・3）